

カキモノオキ

ハクタケ

あたたかいゆき (1/2)

あっさり過ぎたなあ。というのが正直な感想。

5年前の僕は6歳年上の女性とお付き合いしていた。
来年にはもう当時のあのと同じ歳だということに
ちょっとビックリする。

本当に、僕なんかにはもったいない人だった。

当時の職場で上司として働いていたあの人の。
綺麗で凛として、多趣味で洒落っ気があって。
5年経った今でもあそこまで出来た女性を僕は他に知らない。

本当に小さな僕の、凡庸で小さなプライドが。
あんなにも素敵な人を泣かせてしまって。

あなたは僕なんかには左右されてはいけない人だ。
僕のような人間が、影響を与えていい人じゃない。

矮小で、言い訳じみて、潔くもない僕からの別れの言葉。

大きな目を涙に曇らせて、あの人は席を後にした。

あたたかいゆき (2/2)

(ごめん)

その言葉が喉につかえる。

謝ってはいけない。

謝ってしまえば、僕は良心のある人間になってしまう。

僕は非難の対象でなければならない。

あんなにも素敵な人を泣かせた僕は、

愚かで利己的で、悪でなければ。

美しい思い出になど、なっ てはいけない。

別れて良かったと、そう言われなければ。

それから、僕もあの人も職場を離れた。

今はどこにいて、何をしているのかもわからない。

当時の連絡先は残ってはいるけど、

今もあの人につながるのかはわからない。

先日、ふと思い立ってメールを打ってみた。

返事は、ない。

よかった。

二重 (1/3)

目を覚ますといつもの自分の寝室だった。
軽い伸びをした後で立ち上がり、
東向きの窓にかけた青いカーテンを開く。

いつも 夜に食べ過ぎるので朝は摂らない。
姿見鏡に向かって笑顔を作ると、
身支度を済ませてドアを開ける。
隣のご主人もいつものように飛び出してくる。
おはようございます、と会釈すると
彼は『あ、お、おはようございます』
と返して急ぎ足で駐車場へ向かう。
目覚ましをあと5分早くすればいいのに、
僕は苦笑して呟くと、階段を降りた。

イヤホンを耳にセットする。
プレイヤーはランダム再生。
右向き三角をタッチしたら、ペダルを踏み込む。

いつもの運試し。
一曲目がどんな曲かで僕の一日は決まる。

流れ出したのはかすれ気味の男の声。
囁くような歌い出しに僕のテンションは急上昇する。
サドルから腰を上げ、立ちこぎの体制に移行する。
口元は自然にほころんだ。

夕方以降の予定が決まる。
こんな日は、君の家へ帰ろう。

仕事を終えて買い物を済ませ、君の家へ向かう。
プレイヤーは朝聞いた曲をリピートしている。
途中届いたお誘いのメールはまた今度、とかわし、
きれいな白い花を片手にペダルをこいだ。

二重 (2/3)

『ごちそうさま、相変わらず手際がいいね』
君がテーブルに手をつけて立ち上がる。
僕はどうも、と笑い、食器を下げる。
ソファに座ってテレビを眺め、
届くはずのない野次を飛ばす。

ふと君を見ると、いつものサインが出ている。
もう眠いんでしょう、と僕は苦笑する。
『あれ、もう二重になってた？』
君は気づいていなかったかのように振舞うが、
目は口ほどにものを言う。
ふ だん一重の君は眠くなるとわかりやすい。
かく言う僕も、まぶたは重くなっていたところだし。

もうお風呂もためてあるから、入ろうか。
そう僕に促され、君はフラフラと浴室へ向かった。

髪を乾かしてさっぱりしたのか、
幾分目の開いた君と洗いものをすませ、
ぬるめのココアを入れる。
猫舌の君のためにずいぶん温度は下げたつもりだったけど、
顔を上げると眉根を寄せ てふうふうやっている君が居た。
そんなに熱い？と僕が聞くと君は
『うー、そうでもないんだろけど、癖なんだよ。気にしないで』
と少しむくれた顔をする。
それがおかしくてひとしきりからかった後で、
そろそろ寝ますか、とカップを下げた。

ココアで暖まったせいなのか
歯磨きに向かうのも億劫そうな君をせかし、
手早く済ませて寝床に向かった。

真っ暗でないと君が眠れないので
顔も見えない中で言葉だけを交わす。
いつも寝坊しているお隣さんの話や、

職場の上司の理不尽な指示の話。

今度買いたい新しい自転車の話をすると、
君は嬉しそうに行ってみたい場所を挙げた。
それじゃあ今度下見に行ってくるよ、と応えて
僕は眠りについた。

二重 (3/3)

目を覚ますといつもの自分の寝室だった。
軽い伸びをした後で立ち上がり、
東向きの窓にかけた青いカーテンを開く。

いつも夜に食べ過ぎるので朝は摂らない。
姿見鏡に向かって笑顔を作ると、
鏡の中の君も微笑んでいた。

身支度を済ませたらドアを開ける。
隣のご主人もいつものように飛び出してくる。
おはようございます、と会釈すると
彼は『あ、お、おはようございます』
と返して急ぎ足で駐車場へ向かう。

『目覚ましをあと5分早くすればいいのに』
僕は苦笑して呟くと、階段を降りた。

(終)

あかんべえ(1)

「『舌を見せる』って行為がさ、相手を馬鹿にするっていう意味になったのはいつからなんだろうね？」

いつもどおり、答えの必要ない問いを葦原が口にする。

私はコーラの瓶の首を持ってブラブラとさせながら、

「どうしてもよさそうな顔」とはどうやって作るんだったか？を思い返していた。

「お、その顔は何か知ってる顔だね。さすがは雑学王北村！」

葦原が目を輝かせる。

しまった、顔の作り方を間違えたらしい。

「あー」

私は少し考えて、適当なことを答えてみた。

「人からの伝聞だから根拠はないんだけどな。

そもそもの起こりは戦で負けた国の側の捕虜がやりだした事らしいぞ。

従属を強いられた家臣や妻子が、従うくらいならば死を選ぶ、という意思表示で敵方の目の前で舌を噛み切る様が転じて、相手への侮蔑になったとか。」

「へえー」

「『あかんべえ』という言葉も、元はそこから来ているらしいぞ。

噛み切って血にまみれた赤い舌、赤のべろ、赤んべろ、あかんべえ、とな。」

「うわお、そう聞くと怖いよこの仕草！」

葦原、焦る。ふふん、馬鹿め。捏造とも知らずに。

「ちなみにこの話を20歳まで覚えていると、

あかんべえおばけに舌を持っていかれるらしいぞ」

「むぎゃー！ムラサキカガミ！」

馬鹿葦原、さらに焦る。

こんな風に芦原についた嘘は年間平均で50個を超える。

葦原はいまだにマヨネーズは乳製品だと思っているし、

荒木飛呂彦は本当に波紋法をマスターしていると信じて疑わない。

サンタを信じる子供に真実を打ち明けられないように、

私はあまりに疑うことを知らない葦原に本当のことを話せずにいる。

ごめんな葦原。

本当はマヨネーズはマヨネーの木から採れる植物由来の調味料だし

荒木飛呂彦は波紋使いじゃなくて時をさかのぼるスタンド使いなんだ。

いつか私をもっと強くなったら、この真実を打ち明けるよ。

あかんべえ (2)

「ミガカキサラム、ミガカキサラム、ミガカキサラム...」
逆から三回唱える、という民間療法を健気に遂行する馬鹿原。
しかもそれ、ムラサキカガミの方じゃないか。
教えてあげるべきかどうか悩んだが、
私にはそれよりも聞きたいことがあった。

「なあ葦原よ、お前はいつまでウチに居座るつもりだ？」
そうだった。
この質問を投げたところ、冒頭的话题にワープしたのだった。

「あ、ねえねえ、『舌を見せる』って行為がさ」
ワープでループかよ。

「いいですか葦原さん」
「...はい」
たしなめるような私の口調に居住まいを正す葦原。

「ここは私の家です、ここまではok？」
「異議あり」
「早えよ馬鹿野郎」
葦原、頬をぷうと膨らます。
知らんわ。
気を取り直す。

「ここは私の家です。見ての通り、1DKの手狭なアパートですね。
私はあまり物を置かないのでそうでもないですが、
本来なら一人で暮らすのも難儀なことだってあります。」
「だから二人で住めば苦労も半分だよ！」
「だまらっしゃい。...続けますよ。
そもそもあなたは次の行くあてが見つかるまでの間だけ、という条件で
私の家に上がりこんでいるはずですよ。
元々私は他人を家に上げるのを好みません。
出来ることならば何人たりとも立ち入って欲しくない領域です。
その私の領域に芦原さん、あなたは何日間滞在しているかご存知ですか？」
ええと、と指を折る葦原。
「たったの2日とちょっとじゃなかろう」
「よーしわかった、お前にとって5日間は『ちょっと』なわけだな。
ならば今から部屋の掃除をするので『ちょっと』の間出て行け。
終わるまで帰ってくるなよ？」

「ごめんなさい本当にごめんなさいでした」
土下座する葦原。易々とプライドを投げるな。

「それにな...葦原。いいか？
私は男で、お前は女だ。」
それこそが一番の由々しき問題である。
気心の知れた間柄とはいえ一つ屋根の下、
いつ過ちが起こるとも限らない。

というか、既に過ちは起きているわけだが。

あかんべえ(3)

転がり込んできた初日、

葦原は「これからしばらく世話になるから」と言って、
スーパーで大量のビールとワインを買い込んで来た。

その量から私は、

「コイツは一体何日滞在するつもりなのか」と不安になったが、

何のことはない、芦原にとってその酒は一夜の宴で消費しきる量だったわけだ。

今思えばその中からいくらばかりでも、家賃を徴収しておけばよかったという後の祭り。

仕事帰りに迎えに行かされ、その場で強制的に居候を決め込まれた私は
文字通り身も心も言い知れぬ疲労感に襲われていた。

さらに、「自分のパーソナルな空間に他者が存在する」という現象は
想像以上に私から神経を削り取っていった。

そのような状況であったのだから、酒の回りの早さは普通のそれを大きく上回っていた。
別に私が葦原よりも酒が弱いとかそういう事ではなく、
そういう事情があつてのことなのだ。あしからず。

話をもどす。

早々に半目になり、相槌も気だるげになってきた私に対し、
葦原はつまらなそうに息を吐く。

「なんだよー北村ー、せっかくこうやって女の子が部屋に飛び込んできてるんだぜー？

もっとノリノリで酒かっくらうなり押し倒すなり、ねーの？」

まあ押し倒したら火サス級の灰皿パンチが飛ぶけどな。

そう言って自分で笑う（うひゃひゃ、だと？下品にも程がある）。

私は半ば面倒になり、横になりながら適当な反撃を返す。

「うるさいなあ、私は明日も仕事があるし、そんなに長くはつきあえないよ。

それにお前を押し倒した所で一体どんなメリットがあるってんだ」

鼻で笑いながら葦原を見やると、意地悪そうな笑みがあつた。

「ほーう、北村よ。お前、アタシに向かってそんな事言いやがるわけ？

いーよいーよ、その身体にアタシの魅力をたっぷり教え込んでやろうじゃないの」

何だよその不穏な発言は、と言いながら、私は本格的に睡魔の甘い誘いに身体を委ねていた。

葦原は一人酒を決め込むらしい。グラスとボトルの触れ合う、澄んだ音が聞こえる。

「んー」

閉じた瞼に影が差す。

目を開けると、芦原の顔があつた。

あかんべえ(4)

おい、と開いた唇に、葦原のそれが重なる。
と同時に、口中に熱い液体が流し込まれた。

「んっ!？」

ブドウの甘い香りが広がる。
こいつ、口移しでワインを飲ませやがった...!

「んふー」

少しずつワインを流し込みながら、ゆっくりと私にまたがる葦原。
情けないことに私は、葦原の唇の柔らかさと腰に絡む脚の動きに
すっかり身体の自由を奪われていた。

ワインを拒み、私が唇を結ぶと、葦原の舌がそれをこじ開ける。
細く尖らせた舌は唇の隙間に容易く入り込み、
私の口は粘膜同士の接触とアルコールに痺れていく。

口中のワインを全て注ぎ終え、私がそれを飲み下すと、
最後に私の唇をペロリとひと舐めして葦原は顔を離した。
眠気と酔いと快樂でぼんやりとした頭で、
それでも私は葦原に非難の眼を向ける。

「お前は...一体何してるんだよ」

「どうだ、気持ちよかったっしょ？」

私にまたがったままでニヤニヤと笑う葦原。

「気づいてた？北村、途中から自分でベロ出してたよ。

アタシの口の中まで伸ばしてさ。えっろー！」

なっはっは、と笑いながら、グラスのワインを口に含む。
そのまま私の手を押さえ、唇をふさぐ。

繰り返されるワインと唾液の交換。
葦原の両手は私の手首から指先へと移動し、絡みつく。
いや...絡ませたのは私だったかもしれない。
言葉の無いコミュニケーションは続く。

ワインを流し込んで離れようとする葦原の後頭部へ手を回し、固定する。
驚いたように眼を開く葦原を無視して、もう片方の手で腰を抱き寄せた。
ワインの味がしなくなるまで舌を絡ませた後で顔を離す。
腰は抱き寄せたままで身体を起こし、葦原と向き合う。
バツが悪そうに目を逸らし、頬をかく葦原に、私は呟いた。

「この馬鹿野郎。歯止め、効かねえぞ」

グラスに残ったワインを口に含み、葦原と唇を合わせる。

そこから先はお互いに言葉も無く、
部屋には息遣いとたまに漏れる声と、ワインのグラスの音だけが響いた。
その先の行為には進もうとはせず、ただ相手にワインを飲ませる器として。
奇妙な宴は、ボトルが空になるまで続いた。

あかんべえ(5)

目を覚ますと部屋には酒瓶と私と葦原が転がっていた。
二日酔いで割れそうな頭を押さえながら時計を見る。
ぐえ、と小さくうめき、慌ててシャワーを浴びた。

髪を乾かしながら葦原を見やるが、起きる気配は無い。
仕方が無いので鍵と書置きを残し、部屋を飛び出した。
その日の業務が散々だったのは、言うまでもない。

上司の小言と二日酔いでますます痛む頭を抱えて
やっとの事で部屋に戻る。
葦原は一日部屋にいたらしく、寝転がってTVゲームに興じていた。
昨日の酒盛りの残りを手元に置き、時々そちらへ手を伸ばす。

「ん。おはーえりー」
こちらを見もせずにもごもごと呟いた。
「いっそ清々しいくらいの我が物顔だな...」
「いやー、すげー勢いで二日酔いでさー。
もう、首を動かすのもしんどいんだわ」
へっへっへ、と笑う。

同じ状態で半日近い労働を終えた身としては全く面白くない。
むかついたので後ろから頬をつねる。
「あんだよーいへえよーやえろよー」
面白かった。

「いてーなー、こちとら乙女だぞ？少しはいたわれよ」
「だったら少しは乙女らしく振舞え。昨日のことにしても」
どういうつもりだ、と続けようとする葦原は突然跳ね起きて、
「そう！それ聞きたかったんだけどさ。...アタシ、昨日なんかしたか？」
「...は？」
やー、と葦原は照れくさそうに頭を搔く。
「アタシさ、酔っ払うと記憶飛んじゃうんだよね」
マジかよ葦原。そんな御都合主義が有り得るのか。
膝の力が抜ける。

「な、アタシなんか迷惑とかかけてないかな？」
不安そうにこちらを見上げる葦原。
「...馬鹿野郎、自覚があるなら酔っ払うまで飲むなよ...」
「えっ、なに？なに？」
なんだかもう、どうでもよくなってひらひらと手を振る。
「何もねえよ。げらげら笑って酒飲まされたくらいだ」

「ホントか？」

「あーあー、ホントだよ。ったく、付き合わされる身にもなれよ」

「あー、安心した...」

ほっと息を吐く葦原。

酒を飲ませるくらいは許容範囲かよ。

とまあ、そんな風に初日から私は葦原に振り回されているのだ。

振り回されているというか、もうジャイアントスイングだ。

それが1週間続いている。お察しいただきたい。

あかんべえ (6)

で、だ。回想終わり。

「あっ、あははははは、はははははは！」

馬鹿、爆笑中。

なんだこの敗北感。

「きっ、北村とアタシが、だん、男女の関係を？

ないないないない！」

ひー、と苦しそうに息をしながら涙目の芦原が声を絞る。

「...わかんねえぞ。お前酔ったら記憶ないんだろう？

この間みたいな酒盛りで、万が一も考えられるじゃねーか」

「もー、頼むから笑わせんなって...

だいじょーぶだよ、仮にアタシがどうかしたってさ、

北村はそこにつけ込むようなやつじゃねーよ」

うっ。

何か今すごく胸をえぐられたような。

「信頼してくれるのはありがたいけどな...

私だって酔っ払うときもある。

いつだってジェントルな北村さんは保証しかねるぞ」

「ねーよ、仮にジェントルさを失ったところで、

北村は女の子に手を出せるほどその場の勢いには乗れねーもん」

「...」

えぐられて損した。

信頼じゃなくて安牌扱いか。

しかしなあ。

いつまでも居座られるのも困る。

葦原にも事情はあるのだろうが、

私だってそれは同じだ。

たったの七日だと言うのに、一人の時間が懐かしい。

なるべく早い段階で出てもらうしかない。それも自主的に。

となると、手段はあまり多くはない。

よし。

ポツリ

「なきかたがさ こまったけとに おもいだせないや」

深夜、あの人がポツリと呟いていた。

酔っ払っていたのだろうか？

ひらがなだらけだし、字も間違っている。

けれどそれが余計に、生々しさを感じさせた。

「なんか呟いた覚えの無いツイートがあるんだけど」

あの人が数時間後に呟いていた。

やっぱり記憶がないみたいだ。

恥ずかしそうに弁明の言葉を打ち込むあの人の顔が想像できた。

「さくやはずいぶん おたのしみでしたね」

と返すと

「やめて！往年のRPG風はやめて！」

と即座に返信が来た。

深い話はしない。

それが、お互いの性格から勝手に決まった唯一のルール。

僕もあの人も、お互いの顔はおろか、性別も年齢も知らない。

タイムラインだけが僕らの接点。

僕らは用意されたサービスの上で呟き、会話し、ふざけあう。

それが心地よかった。

そんなある日、あの人の呟きがぱたりと止んだ。

飽きてしまったのだろうか。

タイムラインにあの人の呟きが出ない日が1週間続いた。

僕同様、あの人と仲の良かった人たちも困惑を呟いていた。

偶然かもしれないが、彼らもまた、

タイムライン以外であの人との接点がないものばかりだった。

その中の一人が、妙な眩きを残していた。

「あの人さ、実在しないんじゃないかって話。...どう思う？」